

動物介在療法による不登校児童生徒への支援

松澤 淑美 續木 奏絵

X県動物愛護センター(以下センターという)は、2000年開設時より、不登校やひきこもり等の状態にある不登校児童生徒が、動物とのふれあいや動物の世話をして過ごす独自の居場所として、動物を介在させた支援(以下「子どもサポート」という)を実施してきた。

「不登校」とは、文部科学省が「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義している。

「ひきこもり」とは、厚生労働省が「社会的参加(義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など)を回避し、原則的には6カ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態」と定義している。

不登校という言葉は、1992年文部科学省学校不適応対策調査研究協力者会議報告書に初めて記載された。それ以前は、個人や家庭の病理として特定の子どもの特有の問題とされてきた捉え方から、1960年代以降は教育問題という捉え方に変わり「登校拒否」と呼ばれていた。1992年以降に「不登校」という呼び方が定着した。

不登校対策として「居場所」という言葉が用いられる。居場所の概念は多義にわたり、様々な目的に応じて定義付けられている。文部科学省は、学校が自己の存在感を実感でき、かつ精神的な充実感の得られる「心の居場所」として機能することを目指した。内閣府は、子どもの貧困対策として、厚生労働省は、生活困窮者自立支援、母子家庭等自立支援として、家でも学校でもなく自分の居場所と思えるような場所を「子供の居場所」と表現している。

本研究の「居場所」とは、不登校児童生徒を対象に、動物を介在させた支援を行う学校以外の地域資源としての場所と定義する。

居場所に関する先行研究では、その機能の違いによって、一人でのときの「個人的居場所」と誰かと一緒にいるときの「社会的居場所」に分類している。「社会的居場所」にのみ、本来感や自己有用感との間に有意な正の相関がみられ、ありのままにいられるという感覚、自分が役に立っていると思える感覚と関連することが報告された[1, 2]。居場所は単に一人で居る空間に留まらず、他者とのかかわりのある場所を意味することが共通の認識となっている。

動物介在介入については、International Association of Human-Animal Interaction Organization (IAHAIO)により「動物を意図的に取り入れまたは編入された人の治療効果のための目的設定がされて構成されている健康、教育、人的サービス(例:社会福祉事業)への介入」と定義されている。動物介在介入には、動物介在療法(AAT:Animal Assisted Therapy)、動物介在教育(AAE:Animal Assisted Education)、動物介在活動(AAA:Animal Assisted Activity)、動物介在コーチング(AAC:Animal Assisted Coaching)が含まれる。本研究は、筆者が公認心理師としてかかわっており、治療教育目標が定められていることから、「動物介在療法」と表記する。

動物介在介入については、1962年Levinson, B. M.の「犬は共同セラピスト」として機能したという報告から[3]、近年は、人と犬双方の生理活性物質や自律神経反応の測定が行われ、お互いの愛着や絆を強めることが報告されている[4, 5]。猫についてもふれあいによる前頭前野の賦活化、猫との適切なコミュニケーションによる共感などの認知機能を高める効果が報告され[6]、その科学的根拠が数多く示されている。

飯田ら(2008)は、「子どもサポート」の心理的効果について、気分尺度POMS(Profile of Mood States)及び小児AN-EGOGRAMを使用して評価を実施した。POMSは、気分・感情の状態を評価する質問紙で、緊張-不安、抑うつ-落ち込み、怒り-敵意、活気、疲労、混乱の6つの尺度を測定できる。小児AN-EGOGRAMは、子どもの自我の発達を測定できるエゴグラムで、CP(Critical Parent:批判的な親の自我)、NP(Nurturing Parent:養育的な親の自我)、A(Adult:理性的な大人の自我)、FC(Free Child:自由な子どもの自我)、AC(Adapted Child:順応した子どもの自我)の5つの尺度を測定できる。「子どもサポート」の心理的効果としてPOMS(緊張-不安、活気、疲労、混乱)、小児AN-EGOGRAM(NP, FC, AC)に有意な変化を認め、心理状態の改善と自我状態の安定傾向を示したと報告した[7]。子ども達は、活気が低く精神的に疲れる、落ち着かない、過度に人に合わせる、自身のエネルギーレベルが低いといった状態が改善された。

松澤ら(2017)は、「子どもサポート」の生理的反応について、介入当日の開始前と終了後の唾液アミラーゼ活性値を測定し評価を実施した。「子どもサポート」においては、終了後ストレスが軽減される傾向を示した[8]。動物介在療法に関する先行研究で、介入後唾液アミラーゼ活性が有意に低下したと報告されている[9]。「子どもサポート」でも同様の傾向が示された結果となった。

今回本研究では、「子どもサポート」を今後も安定的かつ円滑に継続するため、上記のような特別な心理検査や測定機器を使用しなくても目視で確認できる子どもの行動に着目し効果を評価することを目的とした。

効果の評価は、単一事例研究で得られたデータのために開発された効果量 [10] を用い、シングルケース実験デザイン(Single-Case Experimental Design:SCED)統計分析による比率に基づく効果量の効果指標 PND の解釈基準 [11, 12] を基に評価を行った。見目で分かる子どもの行動を指標として交流的参加観察法(行動目録法)により実施した。

材料及び方法

1 介入期間

2018年4月1日～2022年1月31日

2 対象者

期間中に「子どもサポート」で受け入れを行った56名に、事前にセッションの目的、意義、実施方法、期間について説明し、随時撤回できる旨、実施に同意しないこと又は同意を撤回することによって不利益な取扱いを受けない旨書面で十分な説明を行い同意が得られた者のうち、回数が7回以上の小学生4学年以上4名(男1名、女3名)、中学生16名(男7名、女9名)、中学校卒業以上7名(男2名、女5名)計27名を対象とした。27名には、セッション終了後郵送にて、個人情報等の取扱い、および結果等の取扱いについて確認し同意が得られた。

3 介入場所

センター施設(普及啓発棟、飼養管理棟)、中庭、ドッグラン及び敷地外の散歩コース

4 介入動物

介入させる動物は、X県下の保健福祉事務所から引き継いだ犬と猫、そしてセンターで飼養しているウサギ、モルモット、ヤギとした。センターで管理するすべての動物は、獣医師が健康診断及び人と動物の共通感染症(腸管出血性大腸菌、サルモネラ属菌、カンピロバクター属菌)の検査を実施した。動物の飼養管理項目は表1のとおりとした。セッションに介入する犬の選定基準は表2のとおりとした。

「子どもサポート」でスタッフが同伴しセッションに介入させた犬はA(ハウンド系雑種、メス(避妊済)、体重17.8kg、2017年10月生)、猫はB(日本猫(三毛)、メス(避妊済)、体重4.7kg、2018年1月生)とした。犬Aと猫Bは「子どもサポート」のみに介入し、一般来館者とのふれあいには参加しなかった。

5 介入手順

「子どもサポート」プログラムは表3のとおりとした。

「子どもサポート」実施手順は表4のとおりとした。ひとりにつき毎月1回1時間のセッションを実施した。

対応するスタッフの心得は表5のとおりとした。

活動カードの内容は表6のとおりとした。

表1 センター動物飼養管理項目

| 頻度 | 項目 |
|-----|--|
| 年1回 | 狂犬病予防接種(犬)、7種混合ワクチン接種(犬)、3種混合ワクチン接種(猫) |
| 年2回 | 糞便検査(寄生虫、腸管出血性大腸菌、サルモネラ属菌、カンピロバクター属菌) |
| 月1回 | 定期健康診断(体重測定、触診、聴診等)、シャンプー、爪切り、耳掃除等 |
| 毎日 | グルーミング、日常のトレーニング(犬) |

表2 セッションに介入する犬の選定基準（センターふれあい犬適性評価基準より抜粋）

| 評価項目 | 実施方法 | 結果 | 評価 |
|-------------------|--|---|-----------|
| | 剰余変数※は、実施前に統制しておくこと | あらかじめ決められた特定の行動の生起頻度、継続時間 | 不適の場合は即中止 |
| 見知らぬ人に対して過剰に反応しない | 初めてのふれあいルーム 扉から5m離れて、慣れたスタッフがリードを持って立つ リードを張らない、犬に注目しない 初めて会う大人が扉を開けて入って来て、扉を開けて立ち止まる | 見る、反応して鳴くが、すぐに鳴き止む 毛が逆立ち驚くが、すぐに落ち着く | 適 |
| | | 不適ではない | 要観察 |
| | | 1分以上鳴き続ける 毛が逆立ち凝視し2分以上硬直する 逃げようとして3分以上不安になる 混乱状態になる | 不適 |
| 他の動物に異常な興味を示さない | 初めてのふれあいルーム うさぎのケージから5m離れて、慣れたスタッフがリードを持って立つ 犬に注目しない うさぎケージの前に歩いて近づき立ち止まる | 見る、臭いを嗅ごうとする、近づこうとする ハンドラーが通り過ぎれば一緒に通り過ぎる | 適 |
| | | 不適ではない | 要観察 |
| | | 過度に近づこうとし興奮する 1分以上鳴き続ける 毛が逆立ち凝視し2分以上硬直する 逃げようとして3分以上不安になる 混乱状態になる | 不適 |
| 基本的な合図を理解している | 基本的な合図（オスワリ、フセ、マテ、オイデ）を指示する | 基本的な合図（オスワリ、フセ、マテ、オイデ）を理解し指示に従うことができる | 適 |
| 排泄のしつけができています | 排泄のしつけ | 適切な排泄ができる | 適 |

※剰余変数とは、結果に影響を与えるもの（他の刺激に対する反応が強すぎると評価項目に対する反応が正確に判定できない）ハンドラーが慣れていない、周囲の刺激（見学者、おもちゃ、臭い、BGM等）が強すぎる等

表3 子どもサポートプログラム

| ステージ | テーマ | 内容 | 内容詳細 | 期待する効果 |
|------|------------|---------------|---------------------------|------------------------------------|
| I | そのままの自分で | 自分が好きなことを実施する | 動物とのふれあい 動物と過ごす等 | 緊張緩和、無条件の受容、癒し 安心感、満足感 |
| II | 必要とされている自分 | センターの仕事を体験する | 幼齢動物の社会化 運動、給餌、グルーミング等 | 充実感、達成感、愛情の受け与え 感情の表出、セルフコントロール |
| III | 自分の役割 | スタッフのお手伝い | 特定の個体の世話 館内掲示物の作成等 | 責任感、信頼感、周囲への肯定感 現実感、自己肯定感、自己有用感 |
| IV | 社会参加 | 一般社会との接点をつくる | イベント補助 訪問活動への参加等 | 他者とのコミュニケーション |

表4 「子どもサポート」実施手順

| | |
|----|---|
| 1 | 支援機関（教育・福祉・医療機関等）からの依頼に対し、対象者の情報※1を収集 |
| 2 | 面談（インテーク面接）の日程調整 |
| 3 | 対象者本人、保護者、スタッフ※2で面談（インテーク面接）を実施 セッション内容について書面で説明、同意を得る |
| 4 | 施設見学、対象者の動物に対する反応を観察し記録 |
| 5 | 対象者の希望を確認し、原則ひとり毎月1回1時間セッションの日程調整（予約） |
| 6 | セッション（当日の流れ） |
| 1) | 開始前健康観察（検温、体調不良の有無を記入） |
| 2) | 活動カードの選択（複数枚選択可） |
| 3) | 動物への接し方を説明 |
| 4) | セッション開始 |
| 5) | セッション終了後、家族への報告、次回予約 |
| 7 | スタッフはセッション毎に対象者の様子を記録 |
| 8 | セッション終了後、依頼先へ報告し関係機関と情報を共有 |
| 9 | 年度末に、対象者、保護者、支援関係者にアンケート調査を実施 |
| 10 | 必要に応じて他の支援関係者との情報交換会、研修会の開催 |

※1 対象者の情報とは、動物飼養経験・動物アレルギーの有無とする。特記事項として支援機関から①背景にある長期的な障がいや疾患 ②過去の生育環境の影響 ③二次障害としての不適応（いじめ、劣等感）といった情報提供があった場合は共有する。

※2 スタッフの心得を表5に示す。

表5 「子どもサポート」スタッフの心得

- ・ スタッフは、動物と過ごす対象者に受容的・共感的に寄り添う
- ・ スタッフは、動物と過ごす対象者に指示的・批判的態度で接しない
- ・ 活動カードは、対象者自ら自発的に選択できるように寄り添い待つ
- ・ スタッフが介入させる犬および猫は、AおよびBとする
- ・ 犬Aおよび猫B以外の動物とのかかわりも活動カードで自由に選択できる(誘導や強制はしない)
- ・ 対象者と動物の関係性を遮らないよう注意し傍らで寄り添う
- ・ 動物のストレス行動を見極め、過度な負荷がかからないよう安全管理する
- ・ 万が一、セッション中の動物にストレスサインが見られた場合は直ちに介入を中止する
- ・ セッション中の様子を写真に撮ることについて事前に了解を得る
- ・ セッション終了後、本人の了解が得られれば、家族への報告に写真を活用する
- ・ 依頼先への報告は、対象者の問題点・出来ないこと・苦手なことではなく、潜在的な可能性にも言及する(生き生きとしたポジティブな面や行動所見の記述)

表6 活動カード(26枚)の内容

| | |
|----------------------|-----------------|
| 犬Aとのセッション | Aとゆったり過ごす |
| | Aの散歩 |
| | Aと読み聞かせの練習 |
| | Aに読み聞かせ |
| | Aのトレーニング |
| | Aと車に乗る練習 |
| | Aとドッグランで遊ぶ |
| 猫Bとのセッション | Bとゆったり過ごす |
| | Bと遊ぶ |
| 犬A同伴の作業 (専用の個室使用) | 動物紹介カードづくり |
| | チャームポイントカードづくり |
| | 消しゴムハンコづくり |
| 犬Aを同伴しない作業 | 子犬の社会化補助 |
| | 子猫の社会化補助 |
| | ヤギのグルーミング |
| | 子ウサギ・子モルモットを慣らす |
| | フードづくり |
| その他 | 手術をみる |
| | のんびり本をみる |
| | ぬりえをする |
| | 絵を描く |
| | 写真を撮る |
| | 話す |
| | 休む |
| | アミラーゼを測る |
| ウサギ・モルモットとのふれあい | |

先行研究による「居場所」の機能として、自分の気持ちを素直に表現でき否定されないとあることから、対象者の自発的な発言や行動を優先し、活動カードを対象者自らが選択することを妨げないこととした。活動カードは何枚でも選ぶことができ活動の順番も対象者が決めた。ただし、1時間では回り切れない場合のみスタッフがその旨助言した。活動カードはすべて机の上に並べて自由に選ぶことができた、または何も選ばないという選択肢もあった。26枚の活動カードは、犬Aとのセッション、猫Bとのセッション、犬A同伴の作業、犬Aを同伴しない作業、その他の5つのカテゴリであった。

セッションに参加する対象者は、上履きとエプロンを持参し、他の一般来館者と区別した。

犬Aとのセッションは、犬Aとゆったり過ごす、遊ぶ、散歩に行く、ご褒美におやつをあげる等の活動であった。犬Aはエプロン姿の子どもが来ると嬉しいことが起こることを学習していた。エプロン姿の子どもに快刺激を提示する「正の強化」が起こってオペラント条件付けが成立していた。初対面の子どもでも犬Aは拒否することはなかった。

猫Bとのセッションは、対象者が猫Bをケージから出し遊具で遊ぶ等のかかわりであった。猫Bは元気にじゃれることもあれば対象者の膝に乗って寝てしまうこともあった。猫Bは子どもが来るとケージから出してもらえらることを学習していた。初対面の子どもでも猫Bは親密的な接近行動を示した。

作業は、譲渡対象の子犬や子猫およびふれあい動物（ウサギ、モルモット）の社会化等であった。館内掲示物の制作等の机上で行う作業は専用の小さな個室で行った。個室では犬Aが寝そべっており作業の間ふれあうことができた。犬A同伴の作業もそれ以外の作業も、スタッフのお手伝いという役割があり、動物を含む他者の役に立っている活動であった。

手術室の見学等動物の介入がない活動、又は犬A猫B以外の動物（ウサギ、モルモット、ヤギ）とのふれあいを選ぶこともできた。これらは「その他」の活動とし、対象者が自主的に活動を選択する際、大人が犬Aや猫Bとのセッションに誘導しないよう、センターで可能な活動を数多く用意した。

スタッフは、対象者本人の了解を得たうえで活動中の様子を写真に撮り、セッション終了後に本人および家族に報告する資料として活用した。

6 評価方法

指標とした観察項目を表7に示した。

表7 「子どもサポート」における観察項目（行動目録）

| 区分 | 観察項目（行動目録） |
|------------|---|
| 活動カードの選択 | 1. 大人に促されなくても自ら活動カードを選択する 2. 今までとは違った活動カードを選択する 3. 活動中、時間配分を自ら決める 4. 活動中、動物の都合で変更が生じた場合、自分の意思を表明できる 5. 大人からの提案に対して自分の意志を表明できる(断ることができる) |
| 動物に対する行動 | 6. 動物の動きに反応して感情表出がある（驚く、微笑む、顔の表情に変化がある） 7. 動物の動きに対して思わず声が出る、声を出して笑う、発声がある 8. 動物の行動を言語化する（独語でもよい） 9. 動物の気持ちを想像して代弁する（独語でもよい） 10. 動物に対して自分本位でない関わりができる（自ら近づいて来るまで待つ） 11. 動物との距離が前回より縮まる（自ら触る、道具を使って誘導する） |
| スタッフに対する行動 | 12. 目を合わせることを拒まなくなる 13. 動物の行動についてスタッフと共有する（スタッフと顔を見合わせる） 14. 動物の行動を言語化して自らスタッフに伝える、スタッフに質問する 15. 目の前の動物の話だけでなく自分自身の話をする 16. スタッフと会話のキャッチボールがある |

2018年3月まで、自然観察法で子どもの発言や行動を観察し、行動描写法により生じた行動を詳細に記録したところ156項目の行動が記録された。その中から自発的な行動変容が生じる際最初に生起される行動を指標として16項目抽出し観察項目（行動目録）とした。活動カードを選ぶ場面で5項目、動物に対する反応で6項目、スタッフに対する反応で5項目であった。

初回～3回目までは、初回面談、施設見学及び体験期間とした。介入セッションを開始した回から介入フェイズ、それ以前をベースラインフェイズとした。

表7に示した観察項目をそれぞれ各1点とし、発現項目数を加算して指標得点とした。介入フェイズのうち指標得点がベースラインフェイズの最も高い指標得点を上回ったセッション数をカウントし、介入フェイズの総セッション数で割った値を効果指標 PND とした。

効果指標 PND の解釈基準により、効果量 50%未満で「小さな変化（効果がない）」50%以上 70%未満で「適度な変化（効果が疑わしい）」70%以上 90%未満で「大きな変化（効果的）」90%以上で「非常に大きな変化（とても効果的）」として評価した。

成績

効果量の算出について、セッション回数における指標得点の推移を特徴的な6例について図1に示した。

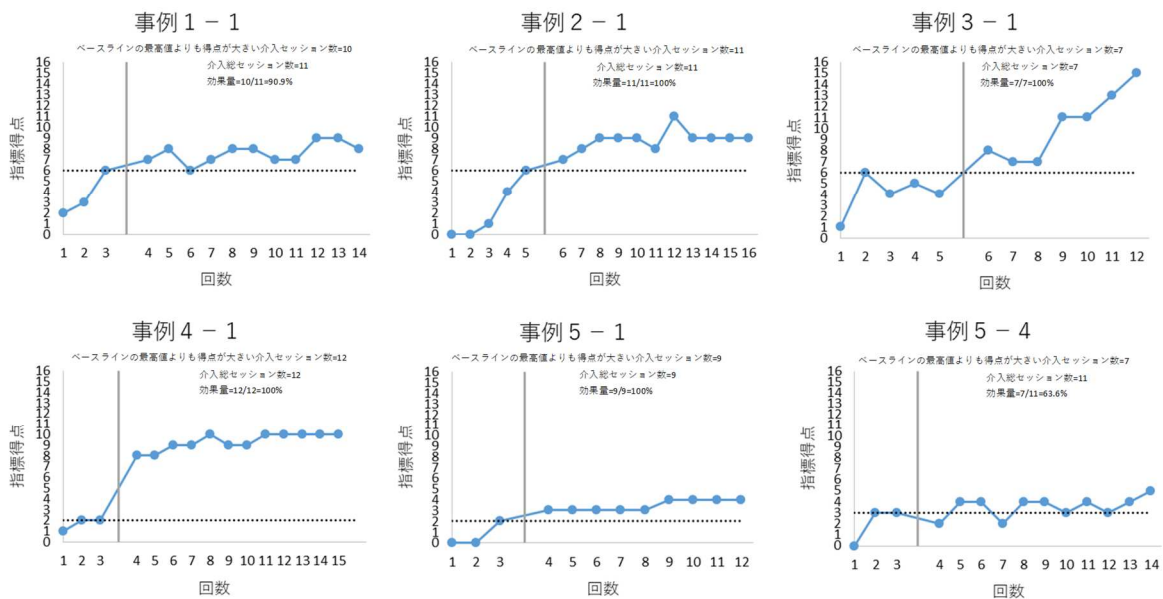


図1 セッション回数における指標得点の推移

事例 1-1 は、毎回犬 A とのセッションを選択した。3 回目までがベースラインフェイズ、4 回目以降が介入フェイズであった。ベースラインフェイズの最高値は 6 で、介入フェイズで 6 を上回った値となったセッション数は 10 回あった。介入フェイズは 11 回実施しているため 10/11 で効果量は 90.9% と算出された。

事例 2-1 は、毎回猫 B とのセッションを選択した。5 回目までがベースラインフェイズ、6 回目以降が介入フェイズであった。ベースラインフェイズの最高値は 6 であった。介入フェイズで 6 を上回った値となったセッション数は 11 回あった。介入フェイズは 11 回実施しているため 11/11 で効果量は 100% と算出された。

事例 3-1 は、7 回の介入のうち 6 回を犬 A と猫 B 両方とのセッションを選択した。効果量は 100% で、指標得点は介入以降大きく上昇した。

事例 4-1 は、犬 A 同伴の作業を選択する頻度が最も高かった。効果量は 100% で、指標得点は介入初回から上昇し高く維持した。

事例 5-1 は、9 回中 6 回は猫 B、7 回はその他を選択した。指標得点に大きな変化はなく介入後僅かに上昇し維持した。僅かな変化ではあるが、ベースラインフェイズの指標得点が低かったため、効果量は 100% と算出された。

事例 5-4 は、特定の個体とのセッションを選択しなかった。ベースラインフェイズと介入フェイズに大きな変化はなく効果率は 63.6% であった。

対象者 27 名について、活動の実施頻度と効果量を表 8 に示した。

事例 1-1~1-4 は、犬 A とのセッションを選択する頻度が最も高く介入セッションの 70% 以上を犬 A と過ごした。4 例とも効果量 90% 以上で「非常に大きな変化」と評価できた。

事例 2-1~2-8 は、猫 B とのセッションを選択する頻度が最も高く介入セッションの 90% 以上を猫 B と過ごした。8 例中 7 例が効果量 90% 以上で「非常に大きな変化」と評価できた。-

事例 4-1~4-3 は、犬 A 同伴の作業を選択する頻度が最も高く介入セッションの 70% 以上を犬 A 同伴の作業に費やした。3 例とも効果量 90% 以上で「非常に大きな変化」と評価できた。-

対象者 27 名のうち、17 名が効果量 90% 以上で「非常に大きな変化」と評価された。効果量 70% 以上 90% 未満で「大きな変化」は 3 名、効果量 50% 以上 70% 未満で「適度な変化」は 5 名、効果量 50% 未満で「小さな変化」は 2 名であった。

動物に対する反応における感情表出で、最も多く観察された行動は「思わず笑ってしまう」であった。自発語の発生は介入後早期に観察された。

表8 活動頻度と効果量

| 事例 | セッション回数 | | 犬Aとのセッション | | 猫Bとのセッション | | 犬A同伴の作業 | | 作業およびその他 | | PND 効果量 (%) |
|-----|----------------|------------|-----------|--------|-----------|--------|---------|--------|----------|--------|-------------------|
| | ベースライン フェイズ | 介入 フェイズ | 回数 | 頻度 (%) | 回数 | 頻度 (%) | 回数 | 頻度 (%) | 回数 | 頻度 (%) | |
| 1-1 | 3 | 11 | 11 | 100.0 | 0 | 0.0 | 9 | 81.8 | 0 | 0.0 | 90.9 |
| 1-2 | 3 | 11 | 11 | 100.0 | 4 | 36.4 | 5 | 45.5 | 1 | 9.1 | 100.0 |
| 1-3 | 5 | 11 | 10 | 90.9 | 0 | 0.0 | 9 | 81.8 | 0 | 0.0 | 100.0 |
| 1-4 | 3 | 11 | 8 | 72.7 | 6 | 54.5 | 4 | 36.4 | 0 | 0.0 | 100.0 |
| 2-1 | 5 | 11 | 2 | 18.2 | 11 | 100.0 | 4 | 36.4 | 4 | 36.4 | 100.0 |
| 2-2 | 2 | 12 | 8 | 66.7 | 12 | 100.0 | 1 | 8.3 | 1 | 8.3 | 100.0 |
| 2-3 | 3 | 9 | 3 | 33.3 | 9 | 100.0 | 5 | 55.6 | 0 | 0.0 | 100.0 |
| 2-4 | 5 | 11 | 2 | 18.2 | 11 | 100.0 | 8 | 72.7 | 0 | 0.0 | 100.0 |
| 2-5 | 3 | 5 | 0 | 0.0 | 5 | 100.0 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 100.0 |
| 2-6 | 3 | 6 | 0 | 0.0 | 6 | 100.0 | 0 | 0.0 | 1 | 16.7 | 100.0 |
| 2-7 | 5 | 11 | 4 | 36.4 | 10 | 90.9 | 2 | 18.2 | 0 | 0.0 | 90.0 |
| 2-8 | 3 | 11 | 2 | 18.2 | 10 | 90.9 | 2 | 18.2 | 2 | 18.2 | 45.5 |
| 3-1 | 5 | 7 | 6 | 85.7 | 6 | 85.7 | 1 | 14.3 | 1 | 14.3 | 100.0 |
| 3-2 | 3 | 11 | 10 | 90.9 | 10 | 90.9 | 1 | 9.1 | 1 | 9.1 | 81.8 |
| 3-3 | 5 | 7 | 4 | 57.1 | 4 | 57.1 | 1 | 14.3 | 1 | 14.3 | 100.0 |
| 3-4 | 3 | 8 | 5 | 62.5 | 1 | 12.5 | 5 | 62.5 | 2 | 25.0 | 87.5 |
| 4-1 | 3 | 12 | 2 | 16.7 | 3 | 25.0 | 9 | 75.0 | 2 | 16.7 | 100.0 |
| 4-2 | 3 | 9 | 1 | 11.1 | 4 | 44.4 | 8 | 88.9 | 1 | 11.1 | 100.0 |
| 4-3 | 5 | 13 | 6 | 46.2 | 0 | 0.0 | 13 | 100.0 | 6 | 46.2 | 100.0 |
| 5-1 | 3 | 9 | 0 | 0.0 | 6 | 66.7 | 1 | 11.1 | 7 | 77.8 | 100.0 |
| 5-2 | 5 | 9 | 2 | 22.2 | 7 | 77.8 | 1 | 11.1 | 8 | 88.9 | 88.9 |
| 5-3 | 4 | 10 | 1 | 10.0 | 5 | 50.0 | 0 | 0.0 | 9 | 90.0 | 66.7 |
| 5-4 | 3 | 11 | 0 | 0 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 11 | 100.0 | 63.6 |
| 5-5 | 3 | 11 | 4 | 36.4 | 1 | 9.1 | 3 | 27.3 | 6 | 54.5 | 63.6 |
| 5-6 | 3 | 11 | 3 | 27.3 | 3 | 27.3 | 4 | 36.4 | 5 | 45.5 | 63.6 |
| 5-7 | 3 | 6 | 3 | 50 | 1 | 16.7 | 2 | 33.3 | 2 | 33.3 | 66.7 |
| 5-8 | 3 | 6 | 3 | 50 | 1 | 16.7 | 2 | 33.3 | 0 | 0 | 16.7 |

考察

犬Aおよび猫Bとのセッションを毎回あるいは頻回に選択する対象者は効果量が高い傾向にあったことについては、犬Aと猫Bがエプロンを付けた子どもに正の強化の条件付けがされており、犬Aと猫B自身も子どもに対して陽性の反応があったことが要因のひとつと考えられた。岩田ら(2019)は、イヌの自主性に配慮した動物介在活動とその評価について「ふれあうか否かの選択権をヒトではなく動物側にゆだねることにより動物に負荷の少ない動物介在介入が実施できる。イヌ主体であるがゆえ、イヌによって即興的に多様な関係性が場に生み出される」と報告している [13]。犬Aおよび猫Bとのセッションは、動物と対象者にお互い嬉しいことがおこり双方にとって有益な関係にあったと考えられた。

活動カードの選択では、大人に促されることなく、対象者が自由に活動カードを選び自らの行動を決定した。ありのままの自分を否定されない安心感と、自分の決めた活動をやり遂げるという成功体験を重ねることができた。

作業では、自分の役割があり、スタッフやセンターの動物など、誰か他者の為に役に立つ体験を重ねることができた。

「子どもサポート」は、動物介在療法で不登校児童生徒を支援する独自の「居場所」であるが、先行研究に示された「ありのままにいられる」「役に立っていると思える」という「社会的居場所」としての機能を有しているといえた。

また対象者は、動物の動きに対して「笑う」という感情表出が頻回に観察された。笑うというポジティブな行動変容が動物によってごく自然に誘発された。発語については、ベースラインフェイズで発声がない場合であっても、介入後早期に自発語が観察された。

このように、動物の存在によって、対象者の行動変容が自然に誘発されることが動物介在療法の特徴といえた。対人コミュニケーションに苦手意識があっても、動物は非言語的な関りが主となるため、話さなければならないという負担感を与えず安全にセッションを導入できた。

また、子どもを支援する際、子どもの変化と身近な家族の変化には相互作用があることが知られている。われわれは、子どもの良い面にスポットを当てるため写真を活用した。セッション中の子どもの写真は、動物とかかわる生き生きとした姿に溢れ、他の人ではなく自分自身のできる姿・望ましい姿を、客観的に子ども本人が繰り返し確認できるツールであった。家族は、子どもの良い変化を写真

で確認できるため、子どもに対する認知がポジティブに変容し、良い相互作用が生まれた。「子どもサポート」では、動物との微笑ましい写真を比較的容易に撮ることができ、変化を可視化できることも、高い効果の要因のひとつと考えられた。

「子どもサポート」による行動観察は、動物の行動に随伴して対象者の行動が発現するので観察しやすく、特別な測定機器を用いなくても効果を評価できた。

しかし、傾向変動の影響を判断できないこと、また、動物以外の要素など剰余変数による効果の可能性を排除できないことが本研究の限界であった。

本事業において、不登校児童生徒の支援について日頃より多大なるご指導をいただいたNPO法人長野県子どもサポートセンター所長、安曇野内科ストレスケアクリニック院長 飯田俊穂先生、並びにスタッフの皆様へ深謝いたします。

また、中学卒業後の支援について、ご助言とご協力をいただいた長野県子ども・若者サポートネット東信事務局 一般社団法人ぶれジョブ 宮尾彰氏に心から感謝いたします。

最後に、センターに関わるすべての職員と委託業者の皆様、そしてセンターで暮らすすべての動物達に心から敬意を表し謝辞とします。

引用文献

- [1] 石本雄真：こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来感、自己有用感との関連から—。カウンセリング研究,43,72-78(2010)
- [2] 廣木克行：臨床教育(Clinical Education)—子どもの居場所をつくる— (神戸大学発達科学部編集委員会編キーワード人間と発達) 大学教育出版, 106-107(2005)
- [3] Levinson BM: Dog as co-therapist, Mental Hyg, 46, 59-65(1962)
- [4] Nagasawa M, Kikusui T, Onaka T, Ohta M: Dog's gaze at its owner increases owner's urinary oxytocin during social interaction, Horm Behav, 55, 434-441(2009)
- [5] Nagasawa M, Mitsui S, En S, Ohtani N, Ohta M, Sakuma Y, Onaka T, Mogi K, Kikusui T: Oxytocin-gaze positive loop and the coevolution of human-dog bonds, Sci, 348, 333-336(2015)
- [6] 内山秀彦, 鈴鹿輝昭, 永澤巧: 人と猫の関係に関する行動生理学的研究—人の性格傾向による猫に対する行動および双方の生理学的変化—。動物臨床医学, 28, 47-53(2019)
- [7] 飯田俊穂, 熊谷一宏, 細萱房枝, 栗林春奈, 松澤淑美: 学校不適応傾向の児童・生徒に対するアニマルセラピーの心理的効果についての分析。心身医学, 48, 945-954(2008)
- [8] 松澤淑美, 小木曾悦人: 動物を介在した子供達への支援: 長野県動物愛護センターの不登校児童生徒支援事業, 信州公衆衛生雑誌, 12, 58-59(2017)
- [9] 森田由佳, 江原史雄, 森田義満, 堀川悦夫: 動物介在療法の POMS と唾液アミラーゼを用いた心理的・生理的評価: 理学療法科学, 33, 401-404(2018)
- [10] 古川洋和: シングルケース実験デザインの実データ解析, 行動医学研究, 25, 182-188(2020)
- [11] 山田剛史: 単一事例データのための統計的方法について—効果量を中心に—, 高齢者のケアと行動科学, 25, 35-55(2020)
- [12] 竹林由武: シングルケース実験デザインにおける介入効果の評価, 心身医学, 61, 708-714(2021)
- [13] 岩田恵理, 澤田明子: イヌの自主性に配慮した動物介在活動とその評価, 動物の行動と管理学会誌, 55, 154-164(2019)